

ハーコート公爵

真青に澄み切った空はインディアン・サマーを感じさせる。街角の花々も夏を惜しむかのように鮮かに映りさわやかな微風に心なしか人も軽やかにゆく。しかしロンドンの空はあてにならないと公爵は今日も傘をステッキ代わりに家を出た。ドーヴァー通りからピカデリーに出ればセント・ジェームズ通りまで遠くない。待ち合わせのカールトン・クラブまで歩くことにした。

公爵はクラブで会う骨董商のことを考えていた。ひと月ほど前ヘンリー・カーナヴァオンから電話があった。彼は、とある骨董商が間もなくカイロに帰る。その前に面白いものがあるので、どなたかに

お譲りしたい、と言っているが君の名前をあげていいだろうか、ということだった。

骨董の蒐集で知られる祖父の代から、見知らぬ骨董商が訪れ、考古遺物品を勧める。時間の無駄にすぎないものもあるが、なんとか資金を繰り出し我が物にしたいものもある。カールトン・クラブに着く頃は心なしか好奇心が頭をもたげ、公爵は足を早めた。骨董商はまだのようだ。

「バーに居るから訪問客を案内してほしい」

「はい、公爵するように」

バトラーはメモを取った。

「窓際にお座りの方が公爵でございます」

バトラーの声がする。

骨董商は遠くから会釈した。ベージュ色のリンネルのスーツが晩秋のロンドンに不釣り合いだったが、日焼けした顔は控え目な面持ちで、今日の空のように青い眼は、かたくなな人柄が垣間見えるようだ。バトラーの話し方からこの人物はクラブによく出入りしているように思える。

「ハーコート公爵、初めまして。突然のお電話でアポイントメントをくださり痛み入ります。お眼にかかれて幸いです」

「いや、ヘンリーから知らせがあり、今日はどんなお話か伺えるのかと思ひましてね」

「はあ、実は先月ハンプシャーに参りまして、ツタンカーメンの発掘に援助されたジョージ・カーナヴォン卿のお墓をお参りしました」

「ほう、あのビーコン・ヒルの墓ですか」

「はい、というのも七代目の伯爵、カーナヴォン卿の孫にあたるヘンリー様に考古遺物品をお勧めしたいと思ひまして、ハイクレアで秘書の方に会うことになっておりましたが。伯爵は骨董品にご興味がないようで、残念ながらロンドンへ戻りました」

「それはそうでしょう。代々馬に興味を持ち、特にサラブレッドの飼育が趣味でしたからね。確かエリザベス女王とも親しくされておられたようだ」

「そのようでしたね」

「それに、ジョージ・カーナヴォン卿のメセナ、つまりツタンカーメンの発掘は彼らに相当高くつきましたからね。もちろんその価値は大いにあったと思いますけど。後世に名を残すことになったのですから。私の家族についてお聞きになったと思いますが、代々カーナヴォン家と親しくしており、小さい頃よく祖父からカーナヴォン卿の発掘についていろいろ聞かされましたよ」

「どんなお話をされておられたのでしょうか。是非伺いしたいです」

「カーナヴォン卿はとても魅力的なお方だったそうで、彼はイートン校をトップで卒業し、ケンブリッジに入りました。ウィットに富んだ彼は人の心を和ませる方だったようなのです。しかもとてもハンサムだったと言っておりました。彼の写真を見るとそう思われませんか。また、新しいものに目のない彼は、馬車の多い時代に自動車を乗り回しており、当時ロンドンのあちこちで物凄いスピードの車を見ると、それはカーナヴォン卿だったそうで」

「その頃のいい時代が目には浮かぶようですね」

「そう、私たちの国は産業革命の遺産がありました。今では考えられませんが、イギリスは大変裕福

で、若者たちは世界を我が物にしようと言う野望があったのかもしれませんが、世界を知ることが、ひとつのエレガントなスタイルだと思ったのでしょう。彼もアメリカはもとより、インドや日本にまで旅行をしたそうです……しかし或る日、例の自動車で事故を起こしてしまって、あれは確かドイツだったかしら……それ以来残念ながら彼はすっかり病弱になりまして、ご存知のようにイギリスの寒さや湿気に耐えられず、ついに氣候の良いエジプトで静養することになったのです。でも向学心のある彼でしたから、もちろん、エジプト考古学を紐ときました。幸か不幸か彼はすっかりその魅力に捕らわれ、早速発掘隊を出したことは想像がつくでしょう。しかし大層な発掘隊にも拘わらず、猫のミイラがたった一つ見つかったのだそうですよ」

公爵は微笑みながら骨董商の様子を窺った。

「面白いお話ですね。たしか考古学者のハーワード・カーターに出会ったのもその頃でしたね」

「そう、その時代、自称考古学者は沢山いました。何かを掘り当てて一獲千金を夢見るような人たちですね。当初ハーワード・カーターもそんな人物に思われていました。ですがツタンカーメンの発掘で一躍最高峰の考古学者になりました。彼は十六年ほどかけて未踏のファラオを調べまくり、王家の谷にあるラムセス六世の王墓に隣接した所に未知の王墓があるかもしれないと狙いを定めました。それがツタンカーメンの王墓だったんです」

「しかし掘り出すにはかなり時間がかかったそうですね」

「その通り、発掘を開始してから凡そ五年をかけてようやく瓦礫の中に王墓へ入る階段を掘り出したのです。しかし発掘には莫大な援助金が必要でハーワード・カーターを支持する人々はうんざりしてしまい、一人、また一人と減ってしまいました。最後まで援助したのがカーナヴォン卿だったのです。

それも支援を打ち切る寸前だったと祖父は言っていました。しかしハーワード・カーターの狙いは見事に的中してツタンカーメンの王墓に辿りついたのですから、彼の嗅覚はやはり凄いと思います。しかし遺憾ながら、あのダンディなカーナヴォン卿はツタンカーメンの棺を開ける前に亡くなることになりました……ツタンカーメンとの面会は叶わなかったのです。しかし彼の死は彼らしい。とてもエレガントだったと思いませんか。若いファラオに現生の席を譲ったのですから。若いと言っても三千年以上前のミイラでしたけど。当時は若いファラオでしたからね」

「なるほど。しかし当時カーナヴォン卿の死について色々な噂がたっており、『それ、ツタンカーメンの恨みだ』『いや、ミイラの復讐だ』なんて新聞に書かれてしまつて大騒ぎでした」

「そう、彼の死についてあまりにもたくさんさんの偶然が重なり合つていたから、そう言われても仕方がない。だいいち魅力的な方だったから、そのような噂は彼を一層特異な存在にさせてしまつたと思われまふ。例えば、或る日、彼はエジプトの寂れた村でカナリアを買いました。イギリスの生活を懐かしんでなのか、カナリアの声を聞くのが楽しみで大層かわいがつていたんだそうです。しかしある朝、餌をあげようとすると、驚くことに籠いっぱいコブラが入つていたではありませんか。カナリアはどこにもいません。可哀そうに、コブラに飲まれてしまったのでしょう。コブラと云えば、思い付くところがある。ファラオの王冠はコブラで飾られていたでしょう。世間はきつと何かを予言しているのではないかと噂していました。おまけにその後、発掘現場に居合わせた一人の老人が、この墓を掘った者は死を免れないだろう、などと言つたのだそうですよ。当時発掘現場を映した写真に、老人がこちらを向いて笑っている姿があり、何とも居心地の悪い写真でした」

「やれやれ、発掘も楽ではないですね」